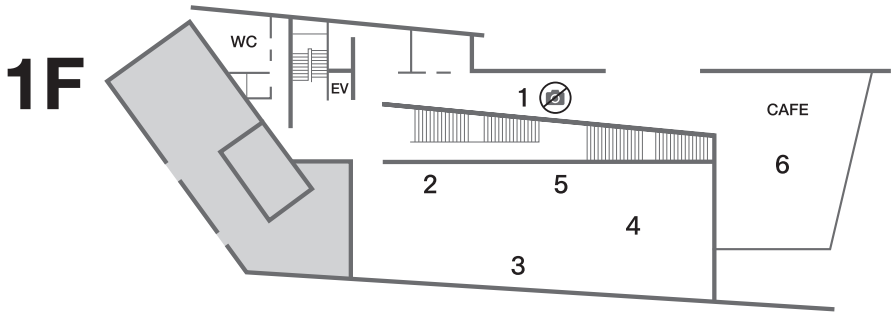
開館記念展示―原点から未来へ

開館記念展示では、ベネッセアートサイト直島の初期から関わりのあった作家や、2016年以降ベネッセ賞をヴェネツィアからアジアへ移行したことをきっかけに関係性を築いてきた作家、さらには近年の現地調査で出会った作家等12名／組による、代表作やこの場所にあわせて構想された新作を紹介します。アートが内包する私たちの生きる時代や社会・環境への鋭い眼差しや問いかけを通して、真に「よく生きる」について考察すること――直島から始まった活動の原点にあるこの思いを改めて確認し、アジアのアーティストたちの作品が放つ様々なメッセージが、未来への希望の手紙となることを願います。



1

下道基行＋ジェフリー・リム

瀬戸内「漂泊 家族」写真館
（「瀬戸内「　　」資料館」プロジェクトより）
2024

瀬戸内海地域の景観、風土、民俗、歴史などの調査、収集、展示を通してアーカイブ空間を創出する、下道基行「瀬戸内「　　」資料館」プロジェクト（2019年～、直島・宮ノ浦）のサテライト展示。2024年、下道は「直島における人々の出入り＝〝流動性〟」に着目し、「瀬戸内「漂泊　家族」写真館」展を企画。ここでは、同展において、マレーシアの文化活動家であるジェフリー・リムとともに直島諸島の漂着物からボックスカメラを手づくりし、直島の風景の中で撮影した直島町民の家族写真と、会期中に写真スタジオで撮影した町民らの写真をあらためて紹介する。

3

ヘリ・ドノ

ヘリ・ドノ論の冒険旅行
2014
空から降る天使
2004

10枚組の絵画は、海、山、森などの自然風景のなかに作家がこれまで制作してきた彫刻、インスタレーション、パフォーマンスの要素が組み込まれ、数十年にわたる画業とその背景にあるインドネシアの近現代史等が反映された大作。政治・社会への鋭い風刺が特徴的な独自の表現世界を通して人間や未来にとっての自然の重要性を示唆する。また、天井から吊るされた魚雷を抱える天使像は、作家の想像とアメリカン・コミックから得たインスピレーションの産物である。自国において言論の自由が抑圧されていた時代を参照し、未来の構築のためには夢見る自由、想像する自由が大切であることを伝えている。

5

パナパン・ヨドマニー

アフターマス
2016/2025

第11回ベネッセ賞を受賞した本作は、仏教的な宇宙観と近代科学、日常との関係から、変化や開発、進展、破壊といった意味について考察を試みる巨大な壁画・彫刻インスタレーションである。タイの伝統的な仏教美術やデザインを用いて、人間の普遍的なテーマである時間、喪失、荒廃、そして終焉に対する危機感への問いを豊かな想像力を通して現代に提示する。

2

マルタ・アティエンサ

ティグパナリポッド（守護者たち）
11° 02’ 06.4” N 123° 36’24.1”E（2）
2022

フィリピン・バンタヤン島を取材し制作したこの作品のタイトルは、「守護者」を意味する。作家は2010年から島の漁業者たちとの協働を続け、「土地は誰のものなのか」、「海は誰のものなのか」という問いに何度も直面した。島は、経済発展の名目の下で観光業、地主、政府の利権のなすがままにされ、2013年以降、9,000人を超える漁業者と家族がふるさとの沿岸地域から追われ、公営住宅に移住させられた。作家は記憶という行為を、抑圧や抹消をもくろむシステムに対抗する手段と考え、鑑賞者にもその行為に参加するよう誘う。彼女は地域に深く根差した団体を運営。地域固有の知恵に注目し、土地、水、文化、コミュニティへの愛に基づいた相互関連プログラムを実践している。

4

ヘリ・ドノ＆インディゲリラ

人類の自覚：中心への旅
2024-2025

ヘリ・ドノとインディゲリラによるこの合作は、いかにアートが異なる考えをもつ人々を繋ぎ、調和をもたらすことができるかを強く訴える作品である。ジャワの伝統的な皮革製の人形劇やカートゥーンといったモチーフを組み合わせ、多様性の美しさや人類の繁栄についての思索を促す。人間の様々な日常の活動が描かれた7点の作品には、自然への敬意や共生、協働などに関するメッセージがこめられている。

6

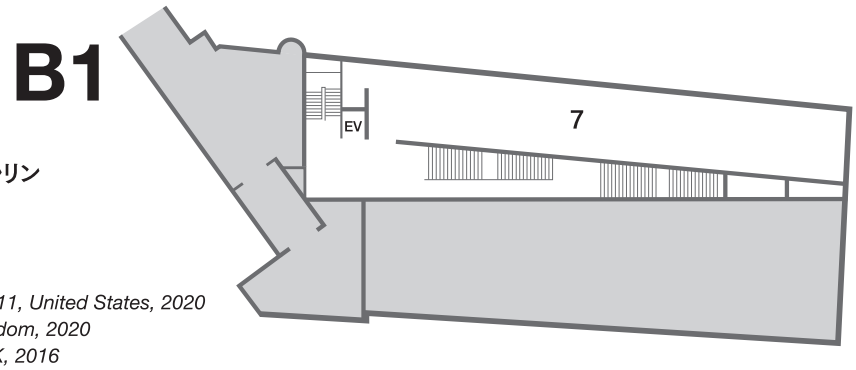
N・S・ハルシャ

幸せな結婚生活
2025

N・S・ハルシャは、色鮮やかで祝祭的な本作を通じ、内側を見る「内観」と外側を見る「外観」という人生における二つの洞察の仕方が結ばれる結婚式会場としてカフェ空間を提示している。カフェの三方の壁面は、それぞれ「結婚式」、「調理」、「食事」を表している。「結婚式」の中央のパネルでは、花嫁（顕微鏡の世界、内観）と花婿（望遠鏡の世界、外観）が祝福されている。二番目の壁には、食事の準備の様子が描かれ、三番目の壁では人々がインコの仮面を外して正体をあらわにし、それぞれの作法で食事をとっている。模倣能力に長けたインコは、人間が自然を模倣し、自然から実に多くを学んできたことのメタファーとして示され、この作品は「知識」に対する飽くなき追求や自然界における調和への考察を促す。

屋外アプローチ付近　2026年完成予定のサニタス・プラディッタスニー　《ザ・サウンド・オブ・ナオシマ》の瞑想ワークショップと仮設パヴィリオン

島内に点在する「直島八十八箇所」に敬意を抱き、禅の公案である「隻手の声―片手で鳴らす音を心耳をもって聞く」という経験を通じてのみ理解できるマインドフルネスの状態から着想。タイの伝統的な技法や直島にあった素材を組み合わせ、瞑想体験に誘うストゥーパ（仏塔）を中心とした展示を美術館屋外に展開予定。完成に先んじて、108枚のブロンズ製の葉でストゥーパを模った時々現れる仮設のパヴィリオンにおいて、瞑想ワークショップを実施。
（実施日時についてはホームページにてご確認ください）



7

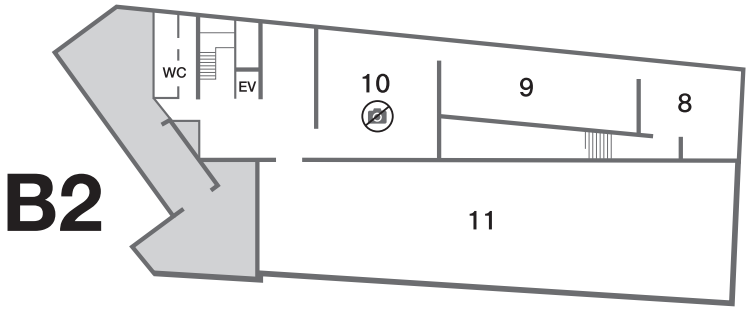
ソ・ドホ

Hub/s 直島、ソウル、ニューヨーク、ホーシャム、ロンドン、ベルリン

2025

Hub, 759 Naoshima-cho, Kagawa-gun, Kagawa, Japan, 2025
Hub, 260-10 Sungbook-dong, Sungbook-ku, Seoul, Korea, 2016
Hub-1, 455 W 23rd St, Apt 15C London Terrace, New York, NY 10011, United States, 2020
Hub-1, Kitchen Lobby, 185 Comptons Lane, Horsham, United Kingdom, 2020
Hub, 3rd Floor, Union Wharf, 23 Wenlock Road, London N1 7ST, UK, 2016
Wielandstr. 18, 12159 Berlin - Corridors 1 & 2, 2011
Hub-2, Breakfast Corner, 260-7, Sungbook-Dong, Sungbook-Ku, Seoul, Korea, 2018
Hub-1, Entrance, 260-7, Sungbook-Dong, Sungbook-Ku, Seoul, Korea, 2018

「Hub」シリーズは、ソ・ドホ自身が暮らしてきた世界各地の家やアトリエの玄関や廊下などを、布を用いて再現した作品。本館で展示している「Hub」シリーズの8連作は、ソウル、ニューヨーク、ロンドン、ホーシャム、ベルリンなどの空間である。本館のための作品構想の過程でソ・ドホが訪れた直島の民家の廊下部分を新たに加え、長期展示としては最大級のものとなる。作家の私的体験や経歴に関わっているが、鑑賞者はその中を移動することで、おそらく自分自身の記憶や国内外の人々が行き交う直島での経験を振り返り、その空間にそれぞれの思いを馳せることだろう。



8

Chim↑Pom from Smappa!Group

スウィート・ボックス（輸送中の道）

2024-

みらいを描く（輸送中）

2016-

Chim↑Pom from Smappa!Group、周防貴之

道（青写真）

2025

東京のスクラップ&ビルドをテーマにした「Sukurappu ando Birudo プロジェクト」（2016年〜）の一環として、東京・高円寺キタコレビルに制作された《道》。いずれ訪れるビルの解体を見据えた移設構想のもと、移設のための「輸送中」の状態を展示することで、美術館をプロジェクトのプロセスの場と設定する。通常は移設されることのないアスファルトや、路盤材として使用されていた建築廃材―どさくさの戦後期、1964年の東京オリンピックに象徴される高度経済成長期、バルコ文化が花開いたバブル期という各時代のもの―が時間の層を成し、タイムカプセルのように収められた輸送コンテナや、移設計画の青写真等を通して、「作って壊された」ものたちの「スクラップ」から自らの手で未来を「ビルド」することの可能性を示唆する。

10

会田誠

MONUMENT FOR NOTHING – 赤い鳥居

2025

2008年より様々なかたちで展開しているシリーズ「MONUMENT FOR NOTHING」の最新作。「日本という国がどのように変質したか／しつつあるか」というテーマのもと、1990年代から現在までの約30年間を中心とした過去の日本における、メディアによる膨大なイメージの記憶を辿るかのごとく巨大な彫刻モニュメントを作り出した。忘却に抗い、回想するための装置のような本作は、作家にとっては「なんらかのあり方による再生への希望」を投影したものでもあるという。

9

村上隆

洛中洛外図 岩佐又兵衛 rip

2023-2025

近世京都の名所や市井の暮らしを俯瞰で描いた屏風絵 岩佐又兵衛筆《洛中洛外図屏風・舟木本》（17世紀、国宝）を参照した13メートルの大作。2024年、京都での個展における初披露を経て、さらに手が加えられた。生活の様子が緻密に描かれた画面上では、2,700人もの人々に加えて、DOB君やカイカイとキキら村上隆のキャラクターたちも京都の街を闊歩する。華々しい都市とそこを満たすドクロの金雲は、賑やかな都人の裏側にあった戦の動乱や様々な災害などを想起させ、生と死、明と暗が隣り合って存在しているという現代にも通じる普遍的なメッセージを発している。

11

蔡國強

ヘッド・オン

2006

渦

2006

イリュージョンII

2006

2006年にベルリン・グッゲンハイムでの個展のために制作された本作は、99体の精巧な狼の群れが全力で走り、ためらうことなくガラスの壁にぶつかる大型のインスタレーション。ベルリンの壁と同じ高さのガラス壁は人と人、異なる集団の間に存在する、見えないが確かにあるイデオロギーや文化の隔たりを象徴している。また、破壊と創造の力という複雑で両義的な関係を表す火薬絵画もベルリンの個展に際して制作されたもので、狼たちがまるで巨大な渦に巻き込まれているかのように円を成して走る様子は、活力に満ちていて力強く、その行動を貫く強い決意を感じさせる。映像作品は第二次世界大戦で破壊されたかつてのベルリンの玄関口、旧アンハルター駅廃墟の隣地で行われた爆発プロジェクトの様子をとらえたもので、暴力と美の相反する力を主題に、同地における栄光と荒廃の幾重にも重なる歴史を暗示する。

撮影禁止マークのある空間の撮影はご遠慮ください。
他の鑑賞者の鑑賞を妨げるような撮影はご遠慮ください。
フラッシュの使用はご遠慮ください。
三脚や自撮り棒の使用はご遠慮ください。
動画撮影は禁止です。
壁やガラスをふくめ作品に手を触れないでください。
飲食・喫煙はご遠慮ください。